

古代史のなかの兄弟を追って ～晩年の構想・大化の改新と壬申の乱～

コラム

山本有三は、昭和24(1949)年に中編小説「無事の人」を発表してから、昭和48年に「濁流 雑談 近衛文麿」の連載を開始するまでの24年間、作品を発表していません。昭和28年に参議院議員の任期を満了すると、住まいを湯河原に移して古代史の研究に没頭しました。大作の構想を練りながら、毎年のように奈良、紀州、九州などの古跡をめぐり、歴史学者の話聞いたといひます。有三が特に興味を惹かれたのは、大化の改新と壬申の乱というテーマでした。これらは、兄・中大兄皇子(天智天皇)と、弟・大海人皇子(天武天皇)が中心となった出来事であり、背景には二人の兄弟の間柄が深く関わっていました。岳父・有三と間近に接した永野賢は、「有三が『日本書紀』を広げながら、天智と天武との性格や行動を対照するメモを書いたのを私はこの目で確かに見た」と伝えています。有三が、対立する兄弟という主題に終生向き合い続けたことを示す興味深いエピソードです。



湯河原の家、門前の石畳にて(昭和40年頃)



晩年の創作ノート
中央兄皇子(天智天皇)の娘であり、大海人皇子(天武天皇)の妻であった持統天皇の天智親が細かな字でメモされている。

事業報告

《第18回 秋の朗読会》 令和4年11月3日(木・祝)開催

秋深まる11月3日、有三とゆかりの深い「文化の日」に、第18回目となる秋の朗読会を開催しました。文学座の瀬戸口郁さんと岡本温子さんをお招きし、有三の長編小説「女の一生」を抜粋して朗読していただきました。豊かな声で何役も演じ分ける瀬戸口さんと、困難に立ち向かう女性・允子を熟演する岡本さん。二人が織りなす作品世界に、来場者からは「動きのある舞台を朗読だけで体験した気がした」など、満足度の高いお声をいただきました。



山本有三記念館オリジナル
文庫本『女の一生』上・下巻を受付にて販売中です♪

ガイド ボランティア

土・日・祝日の午後1時から4時まで解説を行っています。
事前申込は不要ですので、お気軽に声をおかけください。

*新型コロナウイルス感染症対策のため、休止している場合がございます。



編集・発行

三鷹市山本有三記念館



〒181-0013 東京都三鷹市下連雀 2-12-27
TEL:0422-42-6233

URL:<http://mitaka-sportsandculture.or.jp/yuzo/>

過去の企画展館報をホームページで公開しています。 @BungeiMitaka

開館時間:午前9時30分～午後5時

休館日:月曜日及び年末年始(12/29～1/4)

月曜日が祝日の場合は開館し、翌日と翌々日を休館

入館料:300円(20名以上の団体200円) 年間パスポート1,000円

・中学生以下、障害者手帳持参の方とその介助者、校外学習の高校生以下と引率教諭、

「東京・ミュージアムぐるっとバス2023」利用者は無料

アクセス:JR中央線「三鷹駅」南口より徒歩12分

JR中央線・京王井の頭線「吉祥寺駅」南口(公園口)より徒歩20分

三鷹駅南口よりみたかシティバス「むらさき橋」下車徒歩2分

吉祥寺駅南口より小田急バス「万助橋」下車徒歩5分

三鷹市山本有三記念館館報 Yuzo Yamamoto Memorial Museum Report

第26号
2023年3月

有三文学に 描かれた兄弟

対立する

兄弟

会期:令和5年3月18日(土)～
令和5年9月3日(日)

山本有三「1887-1974」の作品には、しばしば対立する二人の兄弟が登場します。特に代表的な作品が、古代日本の神話「海幸山幸」*1に材を採った「ウミヒコ・ヤマヒコ」です。この作品には、兄・ウミヒコと弟・ヤマヒコが、戯れに互いの仕事道具である弓矢と釣り竿を交換し、ヤマヒコが釣り針をなくしたことから起こる兄弟間の感情の行き違いが描かれています。本来の神話は、海幸彦(ホデリノミコト)と山幸彦(ホオリノミコト)の兄弟神が、紛失した釣り針をめぐって相争い、長きにわたる対立の結果、弟神が兄神を服従させ、ひいては互いを祖先とする氏族の運命を決定づけるという道行をたどり



従弟の出井政史(左)と有三(右) 明治43年8月 足尾銅山にて

る。しかし有三は、彼らの争いを神同士のものではなく、ごくありふれた兄弟げんかとして描き出しました。「ウミヒコ・ヤマヒコ」において、兄・ウミヒコは、意固地になって謝ろうとしない弟を厳しく諭すものの、弟が泣き出してしまおうとそれ以上は責めようとせず、また弟・ヤマヒコも、兄の心にこたえるように、ウミヒコに繰り返し「いさん」と呼びかけます。ふたりのけんかは、神話のような決定的な決裂へと発展することなく、兄弟同士の思いやりによって、ほのぼのとした情景へと転じて幕を閉じます。「ウミヒコ・ヤマヒコ」に代表されるように、有三の描く兄弟たちの多くは、立場や意見の異なるから対立関係に陥るものの、片方を服従させることで決着をつけることはせず、言葉や理屈を超えた愛情や思いやりによって、互いの矛をおさめようとします。「生命の冠」、「兄弟」、「盲目の弟」等、様々な作品の中で、有三は、繰り返し兄弟間のいさかいと、その後に浮かび上がる兄と弟の絆を描きました。

なぜ兄弟という主題に惹きつけられるのかという問いに、有三自身は、自分が一人っ子であるためではないかと推測しています。有三には姉がいましたが、生後ほどなくして亡くなったため、実際は一人っ子として育ちました。兄弟のいない幼少期は非常にさびしいもので、母親に、なぜ兄弟がいないのかと詰問するほどだったといひます。周囲には年の近いいとこたちがあり、遊び相手には事欠かなかつたと言ひますが、それは、有三の求める「兄弟」とは異なる味わいの関係性であったのでしよう。後年の随筆のなかで、有三は、兄弟がいなかっために、自分は「兄弟げんかの味というものを、一生しらないでしよう」*2と述べています。有三にとって兄弟の対立を描くということは、すなわち、対立さえも物とみせず許し合うことのできる愛情を描くことと同義であったのかもしれない。本展では、有三作品の数々に描き出された兄弟たちを、各作品の初出誌や選集、舞台写真などの資料からご紹介いたします。有三の幼少期や、創作秘話を明かした随筆等に触れながら、有三文学における兄弟の対立と絆について探ります。

*1:「海幸山幸」は記紀にみえる神話の一つ。山幸彦は天皇家の祖にあたり、海幸彦は九州南部の蛮族である単人族の祖とされる。「海幸山幸」の神話は、単人族の服属起源譚の意味を持つとされる。(参考:『新版日本架空伝人名辞典』平凡社、平成24年3月)

*2:山本有三「ウミヒコ・ヤマヒコ」について(昭和10年2月「現代」)

(文芸企画員・学芸員 三浦穂高)

神話・演劇における兄弟の対立表象と山本有三文学

岩田 美喜 (立教大学教授)

山本有三の作品には、作品の主題を浮かび上がらせる補助線として兄弟の対立が描かれることが多い。『生命の冠』における缶詰製造所の経営者有村恒太郎と金次郎の兄弟や、『津村教授』における津村兄弟といった戯曲の人物たちのほか、未完の小説『生きとし生けるもの』に登場する伊佐早精一郎とその弟もこうしたタイプの兄弟といえる。これらの作品では物語全体を貫く主題が必ずしも兄弟の対立それ自体にあるのではないが、例えば難局にある経営者が優先すべきは顧客への誠意なのか被雇用者を守ることなのか(『生命の冠』)、真の愛には自己犠牲が必要なのか(『津村教授』)といった中核的かつ容易に答えの出ない問いが、考え方の異なる兄弟のぶつかり合いのうちに描かれることで、生き生きとした具象性を持つようになっていく。

その一方、小品『兄弟』や一幕物の短い戯曲『ウミヒコ・ヤマヒコ』のように、兄弟の対立そのものをスケッチとして描き出し、読者や観客にしみじみとした余韻を残す作品も存在する。いずれの場合も山本文学は、神話や伝説にその淵源を持つ〈兄弟の対立〉という古いモチーフを活用しながら、それを彼自身の時代精神に合わせて生まれ変わらせているように思われる。本稿では、特に『ウミヒコ・ヤマ

ヒコ』に注目しながら、西洋文化における兄弟の対立の表象との比較を交え、山本文学が伝統的なモチーフにどのようなオリジナリティを与えたかを考えてみたい。

山本有三と兄弟表象については、すでに彼自身が『ウミヒコ・ヤマヒコ』について「という談話の中で、自分の作品に兄弟が多く出てくることはつとに指摘されており、『どうして多いのか、ぼくにもわからないが、あるいは自分に兄弟のないことが、潜在的に兄弟を求めているのではないか』と自己分析をしている(注1)。こうした彼の文学的傾向の背後にあるのは、山本有三自身が言うように兄弟を持たざる者の純粋な憧憬であったかも知れないし、あるいはひとつの可能性として、少年時代に同居していた父方のいとこ・武を一種の擬似兄弟と感じていたからこそ、実体験に基づいて兄弟というモチーフへのこだわりが生まれたと考えることもできるかも知れない。いずれにせよ、そこで想定されているのは実際に作者や読者・観客が生きているのと同じ地平に存在する生々しい人間関係としての〈兄弟〉なのである。

だが、神話における兄弟の対立は、もっと大きく抽象的な対立を寓意的に表す機能がある。『ウミヒコ』自身も身分にあつた正当な教育を受ける権利がある」と訴える(注2)。

一方の兄は、オーランドが思うよりも根深い敵意を彼に抱いており、「自分でも何故かは分からんが、この魂に誓ってあいつより憎い奴はいない」(一幕一場)と独白し、説明のつかない憎悪に駆られて弟を殺そうとする。つまり、『お気に召すまま』においては、同時代の社会制度に根ざした現実味のある兄弟の対立と、カインにまで遡る神話的な兄弟間の争いが重ね書きされているわけだが、その両方の層において、弱者の立場に置かれた弟が最後には兄を打倒するという物語構造は保持されているのである(この戯曲のように最後に和解する場合も、その前提となるのは弟の成功や兄の改心である)。

だが、山本有三が描く兄弟喧嘩に〈兄の打倒〉という要素は見られない。『生命の冠』の恒太郎は、弟の金次郎の主張を退けて顧客に対す正直さを買いたため、最後に缶詰め製造所は閉鎖に追い込まれるのだが、兄弟ともども寂しく追い立てられる最終場には、弟が溜飲を下げるような雰囲気は絶無である。『ウミヒコ・ヤマヒコ』においてもすでに見た通り、作品の根幹にあるのは弟が兄を出し抜くことなどではなく、自分のしくじりに対して率直になれない弟の心情の動きである。初期の小品『兄弟』は、きこ取りをされていて山番に殴られた兄が、何故だか弟を殴つてしまい、ともに泣きじゃくるという話であるが、これも兄弟が持つ理屈を超えた互いへの想いを描くものであり、どちらかが正しくどちらかが誤っているというようなものでは決してない。

コ・ヤマヒコ』のもととなった『記紀』に描かれる海幸彦と山幸彦の物語は、山民と漁民の対立を描くものと解釈できると同時に、歴史的には大和政権を作った天孫族(山幸彦にあたる)が古代の九州にいた単人族(海幸彦にあたる)を平定する経緯を物語化したものと考えられている。そのため、記紀神話においては最後に山幸彦が海幸彦を懲らしめ、忠誠を誓わせることになるのだが、山本有三は前述の談話において、そこにひっきりかかりを覚えたと述べている。

私はそこを読んでいて、山サチヒコの立ち場に同情はするけれども、どうも山サチヒコは、いやに返そう、返そうとする気持ちが目についた。なくしたのは悪いが、返せばいいじゃないかという考えーこれが妙にごつんときた。

つまり、山本は記紀神話の海幸彦と山幸彦を、彼自身の感性に則つた兄弟として読もうとしたのであり、そこで感じた違和感を『ウミヒコ・ヤマヒコ』で、近代日本に存在してもおかしくないような兄弟の物語として読み替えたのである。

そのため、この作品には兄弟の諍いに勝敗がつくというようなことはない。ウミヒコは、弟が針を失くしたことでなく、彼の態度に対して、「おまえに「返しやいい。」という気もちがあるあいだは、我慢ができないのだ。(略)なぜ、もつとすなおな心になれないのだ」とヤマヒコを叱りつける。一方のヤマヒコは頑なな態度を解ききつかけを見つづけることができないうままだが、兄が寝入ると「にいさん」と声をかけ、彼の横にそつと潜り込むと、幕が降りる。こうした変化はもちろん意図的なものであり、

〈兄弟の対立〉は、洋の東西を問わず、人間の想像力の根っこにある神話的モチーフであろう。だが、山本有三文学は、ときにそのような神話をベースとしながらもあくまで自身と同じ時代を生きる人間として兄弟を描いており、その二重露光のような効果が、山本有三文学の兄弟像にえもいわれぬ奥行きを与えているといえるのではないだろうか。

(注1) 以下、山本有三作品からの引用はいずれも『山本有三全集』全十二巻(新潮社、一九七七年―七七年、新潮社)のテキストに拠つて

いる。
(注2) 以下、『お気に召すまま』からの引用は全つ Stephen Greenblatt, gen. ed., *The Norton Shakespeare: Based on the Oxford Edition*, 2nd ed.(Norton, 2008) に拠り、拙訳を施したものである。

岩田美喜 (いわた みき)

昭和48(1973)年、北海道生まれ、宮城県育ち。専門はイギリス文学。特にイギリスおよびアイルランドにおける初期近代から20世紀初頭までの演劇を専門とする。主な著書に『ライオンとハムレット―W・B・イェイツ演劇作品の研究』(松柏社)、『兄弟喧嘩のイギリス・アイルランド演劇』(松柏社)、『イギリス文学と映画』(共編著、三修社)など。

